

## 江上幸子

元女子中高教諭

## に聞く

## デントン先生と

## 母・久

聞き手

河野 仁 昭

### 父・星名謙一郎と母・久

——昨年冬、デントン先生永眠記念会でお目にかかりまして、ぜひもう少しいろいろなことをうかがいたいと思ひまして。江上先生は愛媛県東宇和郡卯之町でお生まれですな。

江上 家は卯之町ですけれど、生まれたのは松山市の病院です。そのころ病院でお産する人なんていなかったんですが、たまたま父（謙一郎）がアメリカから帰っておりまして、「こんな田舎でお産するのは駄目だ」と、母を駕籠や船に乗せて松山へ行きました。當時は松山へ出るのに山を越え豊後水道を通り三崎をまわってまる一日かかりました。

——たしか明治四十一年六月十五日のお生まれですな。

江上 そうです。

——お父さんはたまたま帰国なさっていたと申しますと、ずっと早くからアメリカへ？

江上 青山学院（當時はそうよばなかった）の第一期生なんです。私も詳しいことは知りませんが資料によると、同志社女子中高に飯田（耕二郎）先生の方がいらっしゃいますしよ、あの先生が父（慶応元年生れ）のことを詳しく調べて下さっていて、青学卒業後最初は

ハワイに行き、仕事のかたわら伝道もしていたようです。洗礼も受けていたようです。青学時代に。

母がぼつりぼつり話すのによれば、ハワイ時代にもずい分いろいろ仕事をしたようですが、モロカイ島にハンセン氏病患者の隔離病院があって、そこへも何かご奉仕に行ったり、後に邦人のための新聞を発行したり。

——お母さん（明治七年六月二十日生れ）とご結婚なさったのはいつですか。

江上 母は同志社を出て（明治三十一年普通科卒業、同三十二年専門科文学科中退）卯之町へ帰りまして、同志社で得たものを生かして幼稚園をつくろうと張り切っていたのですが、祖父に叱られてその方は断念致しました。

——そうこうするうち隣の町へ嫁にやるといふ話が出てきて、母は徹底して抵抗したらしくんです。同志社で身につけたものが余りに大きく、田舎町で生涯をおえることに耐えられなかったのでしょうか。それでは隣の吉田町の星名ならどうだ、あの男は勉強もしているからと、祖父も折れてそのようにしむけたようです。父が十五歳のときに東京へ勉学に連れて行ってくれたのが、母の父末光三郎つま



対談中の江上先生

り私の祖父でした。そんなこともあって。  
 ——じゃア、お母さんはハワイの星名さん  
 をよく知っておられて。  
 江上 いいえ、祖父などはよく知っていま  
 したけど、母は全く知らなかった。(笑)  
 ——知らない男のもとへ、しかもハワイま  
 でお一人で。  
 江上 どうしても卯之町でおさまっていたく  
 なかったんだろうと思います。或は父がクリ  
 スチャンであったということも決心の一つの  
 理由かも知れませんか。あの時代に、何を着  
 て、どんなふうにして行ったんでしょうか。  
 きっとハワイへ行かれる方でもいて、いつし  
 よにつれて行っていただいたんだと思います  
 よ。「明治三十四年四月二十一日ホノルルで  
 結婚式を挙げ領事その他大勢を招いて宴を張

った」という当地の『やまと新聞』の記事を  
 飯田先生が見せて下さいました。

——結婚なさって、その後もハワイに？

江上 ハワイで女の子(私の姉です)が生ま  
 れて間もなく亡くなりました。私と同じ幸子  
 という子供です。「幸子」の墓はハワイにあり  
 ます。父は大変な子ばんのうだったそうで、  
 その子を忘れるためしばらくしてハワイを去  
 り、テキサスへ夫婦で渡ったのだと思います。  
 全然人間がいないような所に広大な土地を買  
 って日本米をつくりはじめたのです。母もそ  
 のころは随分苦勞したようです。でも、両親  
 ともなにしろ変っていますから。そこで生ま  
 れましたのが私の兄の秦(明治三十七年五月  
 二十日)なんです。

——のちに同志社大学長になられる？  
 江上 はい。父は秦と書いて「テキサス」  
 と読ませました。何しろテキサスで生れた最  
 初の日本人だということ……。

——そりゃ無理な読みですね。(笑)  
 江上 無理なんです(笑)。日本の戸籍上は  
 「シン」とよびますが亡くなるまで皆さんか  
 ら「テキさん」「テキさん」呼ばれて、本  
 当の名前を知らない人さえ親しい人のなかに

もいたくらいです。(笑)  
 ——江上先生は松山でお生まれになられた  
 ということは、そのころご両親は帰国なさっ  
 ていたわけですね。

江上 母は若い女の身で、一人ハワイまで  
 出掛けて行ったのですけど、父は結婚のとき  
 「もしご両親に何かことがあった際には、何  
 処にいて何をしてもすぐに久は帰しま  
 す」というかたい約束を末光の祖父と交わし  
 ていたのです。

——なるほど。然るべき手続きを踏んでお  
 られたんですね。

江上 そうなんです。たまたま末光の祖父  
 が喉頭癌になりました、長男を連れ毎日田畑  
 や山林のみまわりをしはじめたという知らせ  
 がテキサスへ届いたものですから、約束は履  
 行しなきゃというわけで、折角軌道にのった  
 ばかりの農地、馬、牛などをすべて捨てては  
 るばる帰って来たのです。羽織袴で玄関に迎  
 えた祖父は一週間の看病の後逝きました。

——テキさんを連れて？  
 江上 そう。

——帰ってこられて江上先生がお生まれに  
 なる。お父さんはその後は四国に……。



幼い頃の星名泰、江上幸子兄妹

はその後、どうなったんですか。

江上 亡くなりました。

大正十五年十二月十二日に、移民の人達に配る金を銀行へおろしに行つて帰るところを、銃撃されて。二十年近くがらばって仕事もやゝ順調になり、多くの移民の人達にも耕地をもたせ、その子女たちの学校もつくり、自分もようやく還暦を迎えようとして、近々帰国しようとして、便りをよこした直後でした。

それはお気の毒な……。

江上 まアねえ、好きで行つていたわけですから。ついに父とは生れたとき以来会いませんでした。

江上 はい。狭い日本にじっとしておれない人なんです。兄がもう年齢になろうとしておりましたし、私は生まれたばかりでしよ、母はあちらでの大変な生活を思い、「子供を連れて行くわけにはいかない」と申しまして。

江上 いえいえ、一段落すると又、今度はブラジルへ。(笑)

——お一人で？

「じゃあ残れ。だれの世話にもならずにいけるなら、子供といっしょに残れ」というような具合です、ひどいものですわ。

——一人でブラジルへ行かれて、お父さん

### 末光家と同志社

——ところで、お母さんは明治三十年代の初期に同志社女学校を卒業なさったようですね、よく田舎から京都へ出てこられましたね。

江上 母の妹の真、のちに清水伴三郎に嫁

ぎますが、その妹の方が先に行つていたんですよ(明治二十八年普通科卒業。母はもうそんな年ではないからと許しがでなかつたので

すが、兄類太郎や妹真が同志社へ行つて大きく変つたのを見て、やと祖父が京都へ出すことを許しました。いい、まして、近所をばかつて、闇に乗じ駕籠でひつそり家を出て、京都へ行つたと申してました。どうしても勉強がしたくて。だから妹より三年おくれ卒業しています。

——その時分から勝気でいらした。

江上 そうなんです。上の姉二人はもう嫁いでいましたから同志社へは行けませんでしたが、真とその妹知(結婚で中退)も同志社へ参りましたし、兄の類太郎も、弟の續もみな同志社。

——同志社一家ですわねえ。お母さんは何人か兄弟がいらっしゃったんですか。

江上 八人です。そのうち五人が同志社で、一番下の弟の信三だけが北海道へ参りました。

——末光信三先生、同志社女学校の？

江上 そう。信三は札幌の学校(東北農科大学—北海道大学農学部の前身)を卒業しま

してアメリカへ留学後（パーモント州ミッドルバレー大学）、北海道大学へもどりました。

——それから後半生を同志社に捧げられることになるわけですね。ご長男の力作先生は現役の教授でいらっしゃる。信三先生の一身上のお兄さんは、同志社に学ばれたあとは郷里の家を継がれたのですが、績さんはどうなさったんですか。

江上 同志社を出て札幌農学校を卒業し四国で農学校の校長などをしていました。その後、郷里の家を継いでいた兄が亡くなり、若い甥たちの後見人になれといわれて郷里へ帰りました。その甥が家を継げるようになると、六人の子供を連れて上京しましてね、東京大学の英文学科へ入ったんです。そして今度は文学士に。

——それはまた偉い方ですねえ、何歳のことき？ 相当なお年でしょう。

江上 多分四十六歳。

——ふうん、六人もお子さんかかえて。

江上 東大を卒業して、明治大学の英文学科の教授になりました。山に登り、詩をかき油絵をよくし篆刻にこり、茶をたしなみ、実にいゝ叔父でした。

### 久は同志社女学校へ捧職

——お母さんのご兄弟は向学心もつよいし、よくおできになったんですねえ。

江上 そうでもございませんでしようが、なにしろ明治のことですから——。

——その時代に都会へ出して勉強させるだけで普通のお家じゃありませんね。ところが、お父さんがブラジルへ行っってしまったあと、お母さんは幼い泰先生と江上先生をかかえてどうなさったんですか。まァ、末光家にせよ星名家にせよ、面倒をみて下さる余裕はおありだったでしょうが。

江上 星名家はもと伊達藩の祐筆でした。が、末光のほうは酒とか醤油の醸造をしたり、ちよっとした地主であったり、まァ田舎のなんでもする家でした。ですから経済的にも余り困ってはいませんでした。けれど、父も母も身内の厄介になるのは絶対嫌だという人達なので、母はアメリカから持って帰ったミッションをふんで、松山で子供二人かかえて仕事をしていたようです。これも根が勝ち気だったからでしょうね。

ところが、その家の隣が松山女学校（現在の東雲学園）で、そのジャジソンという校

長先生が、星名は英語も話せるというので呼んで下さいまして。

——じゃあ、松山女学校で教えていた。

江上 そうですね。何年かしておそらくジャジソン先生とデントン先生が、ミッシェンナリーの集まりか何かでいっしょになられ、母のことをデントン先生が知られたんだろうと思っうんですよ。「ジャァうちの卒業生だからどうしてもうちへ来てもらおう」ということになって、例の無理やりで母は母校の同志社女学校へ帰ることになったようです。

——いつごろでしょうか。私が見た記録では大正五年四月裁縫教師嘱託（大正二年九月より着任していた）となっていました。

江上 その少し前だと思います。デントン先生という方は、お若いときの教え子の面込みがとてよろしくて、未亡人になったり困ったりするとすぐ同志社へ連れ戻され、教員だとか舎監といった仕事を与えられました。

そういう方たちはそれぞれ信仰厚く英語もできましたし、自立されるだけのものをちゃんと備えていらっしやいました。いつでも自立出来るようにというのが、その頃の同志社女学校の教育だったのでしょうか。

——たとえば、どういう方が？ 星名久さんとか……。

江上 竹内梅さん、長谷場知亀さん、原忠雄さんのお母さんの原ともさん、三苦モトさん、荒瀬カツさん。山本美越乃さんの妹さんも舎監をしてられました。

——京大教授の山本美越乃の妹さんも？

江上 そうです。それから三宅キクノさんは幼稚園へ、足利竹千代氏の妹さんの荻原芳枝さん、山口寮の山口よしさん。

——荻原芳枝さんは英語の先生ですね。

江上 そうです、英文科の。それから加藤徳さん、山下えんさん、初鹿野寿さんたちは女学校の事務室にいらしましたね。

——みんなデントン先生が？

江上 そう、それから堀内義さん、荒木幸さん、佐伯小糸・大糸姉妹、佐伯外浪さん、富岡鉄斎の奥さんのとしさん。このような方もしょっちゅう訪ねて来られました。

——鉄斎の奥さんも同志社？

江上 はい、私の叔母と親友で、デントン先生のところへもよく来ておられました。小説家の坂田寛夫さんのお母さんのお京さんなども、はっきり御容姿を思い出します、シャ

キ／＼して。この方たちはデントン先生がまだお若いころ教えられた方たちで、私たちが教わったころとちがって、まだそんなにお忙しくもなかったし、お元氣だったから、きつと教育ご専一に生活も共にしつゝ、ご教育なさったんだと思うのです。だからとても温かく大変こまやかな間柄でした。慕われて、先生もいつまでもお世話をよくしておあげになつたし。

——江上先生が学ばれたころは違いましたか。

江上 違ったというわけではありませんが私達の頃はもう大変なお忙しさで、席の温まる間がないというご様子でした。たとえば同志社のために内外の名士に寄付を頼むために、あちこち手紙を書いたり直接お会いにしたり、建物を建てるため日夜奔走をしたり、とってもお忙しくなっておられましたね。それにもうかなりお年をめしていましたから。

#### 今出川幼稚園

——お話をうかがうのがあと先になりませんが、先生が今出川幼稚園へ入園なさったの



今出川幼稚園卒園式 前列左から3人目江上、後列中央ラーネッド先生 左端島田先生

は、大正何年ころですか。

江上 多分大正なになった年くらいでしょう。——その頃はもう今の位置に？

江上 もう今出川へ移っていました。ラーネッド先生宅の裏手でした。今出川の角の所ありまして、そこのおじさんはとても親切な方だったので私よく憶えていますけど、その今

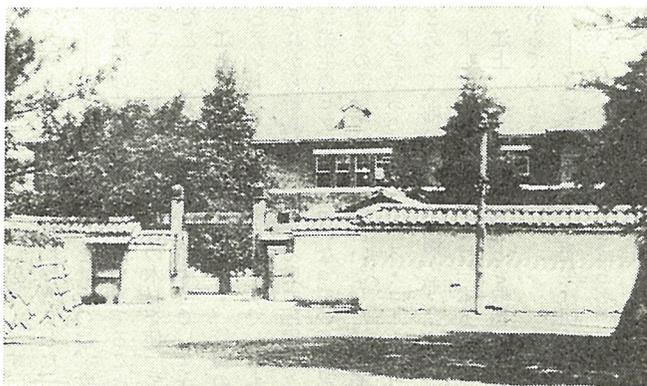
門舎の裏の空地に園舎を建てたようでした。今門舎はその後、烏丸今出川の西北の角に移りました。今出川に電車を通すためだったか(大正六年)、幼稚園をつくるためだったか。私が入園したときにはもう移っていました。これが私たちが幼稚園児だったころの写真です。

——よく残しておられましたね。憶えていらっしゃると思いますか。

江上 ほとんど憶えていますよ。この方がラーネッド先生の奥さん。そして主任の島田先生。

——ラーネッド夫人が園長先生ですね。

江上 そう。これはシャイベリー先生の息子さんのジョン。これは荒木虎三郎という京大総長の坊ちゃん。これが藤井健治郎(京大教授、後に女専教授も)先生の坊ちゃん。上のわくの中は中瀬古六郎先生のお嬢さんで後に女子大音楽科教授になる和ちゃん。これは雀部顕宜というしばらく女学校の教頭をなすっていた方のお嬢さん。これは吉川哲太郎さんの弟さんの四郎ちゃん。同志社本部にいらした広瀬源三郎さんのお嬢さんの芙美ちゃん。



当時の同志社女学校正門 建物は静和館

広瀬さんの家は室町上立売あたりで、そのお隣が原田助先生のお家でした。この方はやはり上立売通りの宇野さんという外科医院のお嬢さんの小春さん。そしてこれは寺町今出川を上った所の三好というお医者さんの息子

さん。——大塚久雄さんの妹さん。府立医大教授のお嬢さんの広木志津江さん。

——学校の先生方や医者の子供さんが多かったようです。礼拝とかキリストについて教えるとか、そういうことは当然あったわけでしょうね。

江上 もちろんです。私がいま憶えている子供の讚美歌は、みなここで習ったのばかり。

——ほかにはどんなことを。

江上 花壇をつくって、折々の花を咲かせました。それから経木を柔らかくしたので籠を編んで、それにそばぼうろを入れてお誕生日のときいただいたり、穴のあいたボール紙を渡されて、それに色の毛糸で思い思いのものを刺したり。今の幼稚園でしていることとそんなに変わらないのです。今から思えばずいぶん進んでいましたね。それから、クリスマスやイースターにはそれにふさわしい行事を胸をわくわくさせながら楽しませてもらいました。

お庭に可愛い人形の家を建て、その中のおままごとなども楽しい〜思い出として今も残っています。

### 同志社女学校とデントン先生

——先生は附属小学校から同志社へ。

江上 はい、そうそう。

——何年ころ。

江上 大正十年だったでしょう。

——生徒の数は何人ぐらい？

江上 四十人ぐらいのクラスが三クラスでしたから、一学年一二〇人くらいでした。

——どんな先生に習われたんですか。お母さんにも……。

江上 母は専門学部の家政科にいましたので、習わずにすみしました。松田道、山中百、中桐道太郎先生。それから湯浅八郎夫人清子先生、安部磯雄さんのお嬢さんの安部京子先生、宮川経輝さんのお嬢さん宮川増世先生たちはすばらしい英語の先生方。クラブ先生、野村義太郎、加藤旭嶺先生等も居られました。

——先生は寮で生活なさったんですか。

江上 いいえ、母がデントン先生のお世話をしていましたから……。

——もう、そのころから。

江上 はい。プリンプトン寮というのがありましたでしょう、そこが元は長屋で、最初

のうちはそこに居たように思うんです。のちにデントン・ハウスの裏に移りました。

——デントン・ハウスというのは、女学校の最初の校舎の所へ静和館を建てることになつて、とりのぞいた校舎の木材を使って建てたときいているんですが、本当でしょうか。

江上 そうだろうと思います。最初の校舎とデントン・ハウスはそっくりでしたもの。

それから新島館のいちばん奥の部屋がクラブ先生のピアノの教室になっていて、私たちはその部屋でピアノを習いました。栄光館が建つまであの土地にテニス・コートが五面ほどあつて、柿の木や棕の樹が並んでいました。

——ないですね、いまは一本も。

江上 栄光館を建てるとき取払っちゃったからでしょう。

——さつき、デントン先生は明治二十年代というか、お若いときはちがってきておられたというお話がございましたが。

江上 私たちも料理や英語を習ったんですよ。でも、そのころ先生は大変お忙しくて、授業中でもご用ができる、「独立話をくだ

さい」とおっしゃって私達には次々しゃべらせておいて、ノートをちぎってご用を書いた

メモを、通りかかった人に渡して使いに走らせたり、ご自分の急ぐ手紙を書いたり……。

——なんですか、その「独立話」というのは、暗唱？

江上 じゃあなくて、みんな一人一人を立てて、テーマもなにも与えずに英語の話をさせるのです。

——即興で、それぞれ思いおもいに。

江上 そうそう。その間にご自分は仕事をされる。又「手紙書きます下さい」といって英語で手紙を書かせたり……。その間に又ご自分の仕事、お忙しくて、時間どおりきちんと授業をするといったことがでぎなくなつていられたのでしょね。

お若いころの先生は、同志社のためにお金を集める必要もなかったし、外国から来られる方も少ないからそれほど外交にお忙がしくなかった。だから教育と宣教師としてのお仕事に、それこそ全身全霊打ちこめたんだとは思ふんですよ。

——わかります。

江上 だからさつきも申しましたように、そのころの教え子がしょっちゅう先生を慕つていつまでもこられるわけですね。先生も

よくそういう方のお世話をなさったし。母のところへも皆さんよく来てくださるなどで、私はその時代の方たちを本当によく見てまいりました。立派な方たちです。

学校が大きくなり、教室もたくさん必要になる。そうすると先生は募金からプランから経営に関することまで、あらゆる方面のことでおつむが一杯だったと思うのです。先生のおかげで今日の同志社女子部があるといっていいくらいなんでしょう。それこそ命がけて同志社に奉仕なさって。

——そうですね、静和館、ジェームズ館、栄光館、そのほかデントン先生のお力によらないものはないといっていくらい。

江上 だから先生は大変だったわけです。国内外の有名なお客さんをお招きしたり、ホテルへ会いに出かけたり。ですから教育という面からいえば、同志社へこられた最初のころのようなわけにはいかない状態だったのではないでしょうか。そりゃ私たちのころだと、礼拝に遅れると追っかけられたり叱られたり、そういうことはいつも皆様の思い出して語られますし、矢張りキリスト教の教育が一番大事だというお思いには変りなかった

と思いますか……。

——デントン神話といっちゃ叱られますけど、生涯すべての点において完全無欠だったかという点、そうでもない。だからこそデントン先生も人間だと……。初期においては教育や伝道に精一杯献身された。明治末期から大正に入ると、女学校の施設・経営面に尽力なさった。そういうふうにとらえるとわかりやすいですね。だから星名久先生のように、秘書兼身のまわりのお世話をして下さる方が必要になってきたわけでしょう。

江上 同志社の総長さんは歴代だいたい同志社出身の方ですわね、だからデントン先生を充分理解して、先生がなさることにはかれこれ言わなくてもいい、出来るだけ自由におさせになって、それでいいことになっていったらどうと思えますけど。

——久先生のほかに、女学校にはもちろん同志社本部にだってデントン先生のご相談のつて、そのお手伝いをするといった役職の方や職員もいなかったでしょうから。

江上 というわけでもないでしょうが、全体的にご苦労と重荷を一人で背負っていらっしゃるといふ感じでしたね。

——柳宗悦の奥さんが女学校の音楽の先生になりますか、やはりデントン先生が？

江上 そうですね。柳夫妻が東京から移って来られるとすぐ同志社へどうぞというわけで、宗悦氏は英文科に、夫人は音楽科にと、子達づれで来られる。叔父(續)が有島武郎さんと仲がよいことを知られると、すぐ有島さんを呼んでくるのか。それは耳も目も早く、同志社のためにただちに動かれる。近衛さんとも親しく、千代夫人もデントン先生に英語を習われました。

——デントン先生のお宅で。

江上 そう。同志社へお供を連れてきては目立つからと思われたんでしょうか、御所のところへ待たせておいて、デントン先生に英語を習い、それから母にししゅうを習って帰っておられました。大丸の下村正太郎さんもよく来ておられました。

——英語を習いに？

江上 下村さんは昼間はお仕事で忙しいから、デントン先生は朝食にお呼びになるんです、いっしょに朝食をなさりながら英語を教えてください、そんなふうにして、それはもういろんな方々と親しくされました。朝食組でお世話



デントン・ハウス

になられた名士も多くいらっしやいます。少しでも同志社に対する理解者をふやすためです。だから、そういう点では全面的に尊敬申し上げております。

——授業もだけど、プライベートな時間もあまりなかったんじゃないですか。

江上 ほんとに大変……。東京へ行かれる

とき生徒のペーパーを風呂敷に包んで持って行って、夜汽車の中でペーパーを直されたというのには有名なお話ですけど、そうでもしないことには、見ている時間なんかなかったと思います。

——江上先生は、昭和四年に専門学部英文科を出られますね。

江上 そうです。

#### デントン先生と母・久

——松山女学校からお母さんが同志社へ帰ってこられたのは、デントン先生がお忙しくて、いろんなことを手伝って下さる方がいることにはどうしようもなくなっていた、という理由もあってではないでしょうか。

江上 まあ、そういう問題もございました。自分の母のことを申すのもなんですが、母も女学校の授業がありますでしょう。それに、学校へ出かける前、起き抜けからデントン先生の裏の戸が開いて。その戸は開け締めするときにキュッと音がする。皆がヒヤッとするのは。母もゆっくりと寝ている間がなくて、子供心に気の毒でした。起きる前から寝るまえまで、時をかまわずでしたから。

——デントン先生がお宅を中心にして、あれだけ社会的な働きをするし、同志社の経営にも関与されるとなると、先生を手伝われる方にそのしわ寄せがいけますわなア。

—— 賄いにイノさんという人がいたでしょう。

江上 福本イノさん。ご主人は春吉さんといつて、高畠素之の奥さんのご両親です。娘さん(卒業生の初江さん)が高畠さんと結婚したのでは田舎にいららうと、デントン先生が両親もいっしょに連れてきて、結婚式の世話までしてあげなすった。

——それは知りませんでしたねえ。

江上 おイノさん夫妻には機械で片腕をなくした息子さんがいますね、両親とその息子さん、三人を先生がひきとって、おイノさんにはパン焼からホテル並みの西洋料理をつくることまで全部仕込み、ご主人にはアメリカから野菜の種などを取り寄せて野菜づくり花づくりをさせ、息子さんには木工細工、皮細工を教えましたね。

——デントン先生はやっぱりえらい人ですねえ。野菜づくりや木工はどこで……。

江上 ご自分の家の裏庭で。全部外国の本をとりよせて教えられる。春吉さん(私たち



左から牧野虎次総長、デントン先生、星名久

はおじさんと呼んでいました)が作る野菜などは雑話にしましてね、あらゆる木の実やいちごのジャム、ピクトルス、トマトソース、アスパラガス、ルーパープなど食堂と台所の間の棚にずらっと並べてありました。だから急にお客さんをお呼びしても、なんとか間にあった(笑)。でも、お客さんを五人お招きするといっておいて八人。十人と云って十五人突然にお連れする、そういうことはしょっちゅうですから、さすがのおイノさんだっ、たまにはふくれて坐り込んでしまいますよ。

——そりゃそうです。

も、心のうちではなんとかデントン先生のお言いつけどおり切りぬけ、先生のお思いを貫かせるよう奉仕させていただいたことに満足していたのだろう、と思うようになりました。先生の「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし」の実行だったのだと理解出来るようになりました。

——お客さんの接待でひとつ気になることはその費用ですが、同志社から多少は出ていたんですか。

江上 いいえ、それはデントン先生が勝手になさることでありますから。

江上 でも先生は、「けれども」「それでも」「どうしても」でしょ、そりゃ大変。

——一種の暴君です。

江上 まアねえ……。

私なども子供のころはなんてひどい人だろうと思っていました。でもこの年になってみますと、お伊ノさんにしても母にして

——デントン先生の生活費はたぶんミッシェンから出ていたんでしようが、それだけじゃ足りませぬね。

江上 常に火の車だったようです。そのころは掛け売りといって、お店の人が月末に集金にくるでしょ、でもお払いするお金なんて全然ないときが多かったようです。

こんな内輪ばなしまでしていいのかしら。私いままであなたにも申し上げたことがないんです。

——いや、そこをお聞きしたいんです(笑)。

払いはどうなさっていたんでしょう。

江上 ……先生はかけとりの人とたまに顔を会わずと「私 no 関係 at all」とおっしゃって、戸をビシヤリとお閉めになるという具合です。

——何かしなきゃいけないわね。同志社は見てみぬふりしていたのかなア。

江上 弟の績が見かねて、東京へ来いといつて三回ほど母を迎えに来ました。

——でも、いかなかった。

江上 デントン先生が泣きなさるんです、「ごめんさい、ごめんさい」って。母もデントン先生がご自身のためではなくて、同

志社のためにそうしていろいろやっていらっしゃることを十分知っていましたから。

——デントン先生の私生活はつましい？

江上 これ以上の質素はないというほど質素でした。実に生涯ミッシヨナリー魂を貫かれたと思います。衣服だって靴下から下着まで新しく買うということは全然ないので、全部古いいただき物ばかりです。だから靴下など古い電球を入れて継いで継いで元の生地がなくなっていました(笑)。母は夜それを私たちに隠してつづっていましたけど、私達がいやがると思って。

でも、案外おしゃれな面もありましたね。

洋服の丈が長いのがはやりだと長くして下さい、短いのがはやると短くして下さい。母にそう言って。一枚の服を。(笑)

先生がおやすみになる部屋も、二階東側の三畳ほどない床が斜に傾いたような部屋で、そこに粗末なベッドを置きましてね、まわりは風呂敷包みや本や荷物でいっぱい。その中で……。病気になるれて階下の部屋を使うようになるまでずっとそうでした。

——病氣されてからもずっとお母さんが。江上 そうなんです。そのころはもうお手

伝いさんにも暇を出してしまっていましたから。この間の会(デントン先生永眠記念会)で看護婦さんの安田さんもおっしゃっておられましたけど、たえずシャツがよごれる。そのとり替えとか下のお世話とか、安田さんが「私がします」といくら言っても、母は「私、慣れていきますから」と、最後まで決して他人にはさせませんでした。

——全部お母さんの手で……。

江上 え、先生が寝たきりになられましたから。戦後は石鹼もやっ手に入るようになりましたし、私も信州からお手伝いさんを連れてかえりましたから比較的楽にはなつたんですが、戦争中は本当に大変でした。デントン先生はお宅から一步も出られなかつたし、物もなかつたりで……。野菜作りも薪わりも全部しました。私が疎開からかえてみると、母が持っていた箆笥も机も自分の家の床板も全部なくなっていました。

——どうして？

江上 燃やしたんですね、薪木がなかったでしょう、だから。デントン先生がお亡くなりになる前などは、昼といわず夜といわず星名！星名と呼ばれるものだから、夜はべ

ッドを並べて、先生の手と母の手を紐でつないで、お呼びになる度母がひもをひっぱって「いますよ、いますよ」と安心させるのです。一日も欠かさず末光信三が学校の往きかえりに訪ねてくれる。まるで時計のようにきちんと様子を見にきてくれるのが何よりの助けだったようです。

——ご姉弟で、ほんとに最後までよく奉仕しておあげになられたんですね。昭和二十二年十二月二十四日、クリスマス・イヴにデントン先生は亡くなられますが、お母さんの後半生はデントン先生に対する奉仕がすべてといった感じですねえ。くたびれ果てたんじゃないですか。

江上 夜もおちおち寝ていられないというような年月が続きましたからね。でも精一杯のことをしてあげられた、母はそれで十分満足していたでしょう、私も今は心からそう思えるようになりました。今になってやっとな様にお話出来る気持ちにまで至りました。

——お母さんが亡くなられましたのは？

江上 昭和二十九年五月九日でした。この料理の本は母がデントン先生から頂いたもので、「星名久へ」と書いてございますよ、

母が頂きましたものはこういったものが二、三点ですけれども、この料理の本を使って田舎から出て来たばかりのおイノさんに、料理を教えていた母の姿をはっきり思い出します。

——デントン先生の形見ですね。

江上 母が亡くなりましたとき、私、籠箆の整理をしたんですけど、デントン先生にいただいたのかどうか、古いアメリカの国旗がありました。これがそうです。それから食堂のおばさんにあげる物と、死んだとき自分が着る物が入っていただけで、あとにもありませんでした。

——からっぽ？

江上 はい、母はなに一つ残しませんでした。

### 同志社女子部教員とその後

——ところで、江上先生も戦後、同志社女子中高の先生をなさいますね。いつから？

江上 昭和二十一年四月二十一日からです。信州から子供を三人連れまして、母もと一緒にか同志社へ帰って参りまして、帰った翌日から女子部で教えました。先生が足り

ないからということで。

——じゃ？ 旧制の女学校だったところでですね。

江上 そうでした。新制に変わりますとき又新しい教員資格試験を受けたんですよ、なんとすることもなくくれましたけど。

——いつ頃まで在職なさったんですか。

江上 あと六カ月ほどで満十五年でした。

——辞められたんですか。

江上 はい。もう半年いたら恩給がつくのと云って下さる先生方もいたんですけど。私、母と同じで、もう嫌だと思ったら我慢できないうんです。我儘なんですわ、きっと。

——なぜ、嫌だと思われたんですか。

江上 あのところは組合運動がずいぶん盛んになって来ました。そういう運動を見たり理事長室の前へ行って坐り込みをせよと強いられたりすると……もちろん組合運動を全部否定するわけではありませんが、私にはやり切れない思いが強かったのです。こんな状態で同志社的な、良心的な教育ができるのかと、強い疑問を覚えてましたね。

——教職員組合ができたころなんですけど、教職員の給与水準が低かったし、生活

が大変なときでしたから。

江上 それはわかるの、でもお金がないと理事の方はいっておられるし、事実そうでしたから。それを私たち坐り込みまでさせられてましたね。私、それが疑問でしたの。良心にそわないことをしていたのでは、本当の良心教育、同志社教育はできないと思ひまして、だから辞める決心をしたのです。

——その後は社会的にいろんな面で活躍なさるわけで、それがお出来になるだけものがあつたから、いさぎよく辞めるといふこともお出来になったのでしょうか……。

お兄さんの星名泰先生のこととか、叔父さんの末光信三先生のこととか、いっぱいおきかせいただきましたことがあるので、またなるべく早い機会にも一度お邪魔させていただきたいと思ひます。

今日はとてもいいお話をありがとうございました。それから珍しい写真もたくさん見せていただきました。

(一九八八年二月五日、江上宅で収録)